

2015年3月15日



ジャンク品を扱うタイのナイトマーケット

買う力

GNH研究所 代表幹事 平山修一

タイは飲食店や商店が多く、日本同様お店選びに迷う事が多い。TPOや財布の中身にあわせて様々な種類の飲食店やショップがあり、選ぶ側としては戸惑う事も多い。その反面、専門店は少なく、必要な機材や資材を買うのはタイ人でも難しいと聞く。

タイは選択の社会だ。選択肢が多い分迷うが、必ず良い選択肢はあるという考え方だ。つまり悪い選択肢は切り捨てるか、無視をする。一期一会という言葉があるが、まさにタイでの買い物も然り、今あるその商品が継続的にそこで購入できるとは限らない。

「これ賞味期限切れているけど大丈夫かなあ」この時の購入判断は難しい。貴重な日本食である。次回、いつ手に入るか分からないので、賞味期限よりあるかないかが大事である。つまりその賞味期限切れの商品を買う・買わないは、その人の五感や経験則に拠る部分が多い。

逆に言えば、いつから私たち日本人は自分の目で確かめて物を買わなくなったのであろう。知らない第三者の表示を盲目に信用し、商品を買うことに戸惑いがなくなったのはいつからであろう。

友人から聞いた話だが、先日、タイの某高級デパートで購入した子供のゲームソフトが純正品で無かったらしい。外見は間違いなく純正品の装いを呈して

いたのだが、中身は純正品とは明らかに違う物であったらしい。

苦情を受けたデパートの店員曰く「誰も純正品ですと言って売っているわけではない」の一言だそうである。有名デパートだからと言って盲目的に信用は出来無いのである。ある程度は自分が納得いくようにちゃんと確認する。タイではその必要性があるのである。

購買をする際の物を選ぶ力、つまり買う力が試される。偽装商品を見分けるとまでは誰も言えないが、少なくとも基本的なチェックをすれば大半の被害からは免れる事ができる。食品なら、見た目、匂い、変色の確認、一般の商品なら、包装、中身の確認、作動確認など基本的な事である。

現代社会は、日々変化する環境への対応力が求められている。これを養うには、問題に直面した時の解決経験を重ねることが重要である。その成功の繰り返し単なる知識が身になる過程である。そしてこの「学ぶ習慣」を身に付けることが本来の意味での学習でなかろうかと筆者は思うのである。

そういう意味でもタイには「買う力」を養う学習の機会が溢れている。たまには市場に行って商品の吟味をしてみても如何であろう。段々と自分なりのこだわりが出てきて、自分なりのセンサーが復活するかもしれない。

「若者達の願い」

青木薫

1月17日、ブータン日本語学校では第三回目の「日本語スピーチコンテスト」を開催しました。スピーチのテーマは『家族』と『ブータンの魅力』。多くの学生がスピーチのテーマに『家族』を選びました。後でつらつら、これはブータン人にとってど真ん中過ぎるテーマであったと、日本人校長である私は深く反省しました。つまりそのくらい、彼らブータン人にとっては家族とは人生の真ん中、心の中心に位置する存在なのですね。

さて、当校では10歳～35歳のブータン人が専任日本語教師に日本語を学んでいます。それらの中から原稿審査で選ばれた学生達が、日本語でスピーチを行いました。そのなかでも印象的だったのは、「日本語を学んで、日本語ガイドになって家族を助けたい。」という希望を持つ若者が多かったことです。当校の学生の多くは地方出身で、実家は農業をいとなんでおり、たいていの場合が大家族です。彼らは家族とは一番大切なもの、尊敬しなくてはいけないもの、自分の宝物と日本語の表現こそいろいろですが、みな「自分にとってかけがえのないもの」という点で共通しています。

日本語学校で勉強し、日本語ガイドになってお金を稼いで家族に送り、いずれはティンプーに呼び寄せて暮らしたい。自分がガイドとして稼いだお金が家族をシアワセにする。そう信じてまっすぐに突き進む若者達の姿は、それは清しいものです。実際、地方から出てきて金銭的に苦勞をしている学生のほうが、学習意欲も高く努力家でもあります。中には家庭の事情でクラス12を出ていない若者もいるため、そういう学生には夜間学校に通うようにと薦める、いえガイドになりたいという希望を持つ子には、資金援助をして進学を半ば強制しています。というのは今やクラス12を出ていなければガイドになることができないからです。

学生達が胸をはって語る、家族を支えるという望みはとても素敵なものです。二十歳そこそこの若者が自分のこと以前に、故郷にいる家族の安寧を願う。同じ年のころの自分のことを思い出してみれば、とてもそんな発想はなく恥じ入るばかりです。そういう点では、ブータンの若者達の純な家族への思いには胸が震えます。ただ、村での生活から抜け出すことが家族をシアワセにすると信じて疑わない若者のスピーチを聞いてると、どうしてもある種の不安が湧き上がってきて仕方ありません。それは、突き詰めていくと、つまり今の日本のようなライフスタイルを目指すということなのだろうか、と。私自身、地元を出て進学し東京で就職、その生活こそが一番素敵なことだと信じて疑うことがない時期がありました。これこそが人生だと迷いを直視しないで生きていたように思います。それがブータンという国に出会ったことで立ち止まり、生き方の見直しをすることが出来ました。

うちのオフィスにはガイドをして貯めたお金で、村のお母さんに乳牛を買ってあげたという青年がいます。こういうお金の使い方が素敵だなと思ってしまうのは、私の勝手な思いなのでしょう。年老いたお父さんやお母さんも、心底ティンプーに行つて暮らしたいと思つているのかな？と、かんぐってしまうのも、外国人妻の独りよがりなのでしょう。だけど、メモリアル・チョルテンに集うお国訛りの人の輪が、毎月毎年、膨らんでいくのを見るにつけ、ブータンはどこへ行こうとしているのかと感じてしまいます。

しかし、そんな外国人の感傷など吹き飛ばす思いと力が学生のスピーチにはあるのも事実です。優勝したドルジ・ワンディのスピーチの一部をご紹介します。本人が書いたままです。

わたしはガイドになりたいですから日本ごをべんきょうします。ガイドになったらいろいろなひとをたすけることができます。ガイドになっておかねをもらつてそのおじいさんとおばあさん*をてつだいます。そしてりょうしんといろいろなひとをてつだいます。みなさんもいいひとになっていいしごとをもらつてたくさんひとをてつだってください。

さいごにかぞくはかみさまとおなじですからかぞくにさからわないでください。そしてそんけいしててつだってください。そしてらいせであえるようにおいのりしましょう。

*そのおじいさんとおばあさん：ドルジがティンプーで知り合った家族に見捨てられた孤老たち。

青木 薫（あおき かおる）

GNH研究所 研究員

ブータン在住17年。2000年より首都ティンプーにて旅行会社を経営。2011年にブータン初の日本語学校（BCJS）を開校。

ブータン日本語学校（BCJS） Facebook：
<https://www.facebook.com/bcjs.bhutan>

会員コラム

「しあわせは歩いてこない」

津川智明

しあわせは歩いてこない
 だから歩いてゆくんだね
 一日一步三日で三歩
 三歩進んで二歩さがる
 人生はワン・ツー・パンチ
 汗かきべそかき歩こうよ
 あなたのつけた足あとにや
 きれいな花が咲くでしょう



45年前に水前寺清子さんが歌った「三百六十五歩のマーチ」が大ヒットしました。

幸せはこちらから取りに行かなければならないものだと思います。あるいは作っていかねばいけないうもの。しかもそれは自分自身でやらねばならないということです。幸せだと思えばそれで幸せになるんだ、という人がいます。思うためには、思えるための背景が必要です。その背景は自分で作れるものと作れないものがあります。

ブータンのGNHが有名になって15年くらいになるでしょうか。GNPよりもGNHを大事にして国づくりを進めていく、という国王以下政府高官が力強く唱えた勇気に喝采をおくりました。そして幸せになるには物質的豊かさだけでなく精神的な豊かさが大事なのだとということに気づかされました。これまで2回行われた国政選挙の政党公約は、いかなる政党もその公約のおおもとにGNHが掲げていました。したがって、政策の実施においては、GNHを基本にした政策理念をもって教育、医療、環境、行政、農業、建設、通信等さまざまな分野で国づくりが進められています。GNHをベースにした国づくりは、幸せと思えるための背景づくりです。国政、あるいは地方行政の政策が人々の幸せを第一義として実施されることはすばらしいことです。

だからといって個々の人々が幸せになれるという保障はありません。

個々人が幸せとなるための背景（社会の平和や安定、恵まれた自然環境、活気のある地域など）が整えば、次は幸せを引き寄せるためにさまざまな努力が必要になります。例えば仕事に精一杯取り組むとか、家族との時間をできるだけ多くするとか、地域のために奉仕活動をするといったようなことでしょうか。

しあわせは歩いてこない、だから歩いて獲得しなければならぬ。山あり谷あり、前に進むだけでもたやすいことではないかもしれませんが。しあわせはそんなつらい思いをしながら歩き続けてやっとたどり着いたところにあるのでしょうか。

津川 智明（つがわ ともあき）

GNH研究所 会員

1983年に国連ボランティアとしてブータンに赴任。以来、JICA個別専門家、青年海外協力隊調整員、JICA 地方行政支援プロジェクト 専門家として長きに渡りブータンの支援に携わる。2014年8月に終了帰国。

会員コラム

「里帰りしたヒマラヤ桜」

白井一

「しき嶋のやまごころを人とはゞ朝日にゞほふ山ざくら花」の歌は、江戸時代の国学者の本居宣長（もとおりのりなが）の心を詠ったものとして良く知られています。当人の解説では「日本人である私の心とは、朝日に照り輝く山桜の美しさを知る、その麗しさに感動する、そのような心です。」とされています。その様な大和心に例えられた桜の苗木をこの度ブータン王立大学の構内に植樹しました。右の写真は、最初の記念樹を王立大学のNidup Dorji副学長(Vice Chancellor)が選定しているところです。

日本技術史教育学会とブータン王立大学（RUB）が共催で、2014年8月21、22日に首都ティンブーで2014年度ブータン国際会議(ICESTEHE 2014)を開催しました。それを記念し、開会式の式場で、下の写真にある紅華と舞姫の2種類の桜の苗木の贈呈目録を王立大学にお渡ししました。その目録に従い2015年2月11、12日の両日、ティンブーの王立大学構内で植樹式を開催し、合計50本の内の23本をRUB構内に植樹しました。残りの27本はパロ、デワタン、タシガンの各カレッジの構内や農業機械センター等に分散して植樹されました。

本事業は両国間の尚一層の結びつきを図る目的と同時に、「桜の里帰り」を図る意図もありました。山桜のオリジナルはブータンのあるヒマラヤから来たという思いです。5000 kmも離れた日本迄、悠久の旅を続けた桜が、その後日本人の心をとらえ、長い時間をかけて美しく変化しました。その桜を、日本人の心と一緒に里帰りをさせる事業です。今回は新宿御苑で桜の維持管理をされているグリーンアカデミークラブの植栽の専門家の支援を得て植樹されました。この桜の苗木の贈呈を発案された方は、東京日本花の会の代表理事の溝口富美子様です。ブータンでは溝口富美子様と共にこの事業は末永く記憶されると思います。



東京農業大学短期大学教授の染郷正孝著『桜の来た道』では、桜を通じたブータンと日本の繋がりを以下のように述べています。

「日本のサクラは間違いなく春に咲くものです。しかし、遠い昔、秋に咲いた先祖の性質が花の時期を間違えたように、突然ある枝の一部に、秋咲の性の遺伝子が表に現れたものと思われまます。サクラはもともとネパールやブータン地方を原点として、北上進化する過程で少しずつ変化し、特に四季の変化のはっきりした日本列島ではいろいろなサクラに分化した。つまり秋に咲く性質を「休眠」と言う性質に変えて、適応し生きのびて来たものと考えられます。先祖返りを起こし秋に咲くサクラの枝変りを育種家が接木で増やし今日に伝えられたものと考えられます。」(P22～33)



紅華 (Prunus "Kouka")

舞姫 (Prunus "Maihime")

白井一 (しらいはじめ)

GNH研究所 会員

NPO法人 国際建設機械専門家協議会 代表理事、日本ブータン友好協会 幹事、株式会社 テラグリーン 代表取締役。これまで130ヶ国以上を訪問し、技術調査・案件形成調査等に從事してきた。

桜の花はデリケートで取扱いが難しい

美しいものには虫がつきやすいと言いますが、桜もその例外に漏れず虫がつきやすく、苗木の肌も赤子の皮膚と同じで柔らかくて弱く、取扱いに神経を使います。5000kmの長旅の後の植樹は勿論その後も苦労が絶えません。移植に適した時期は葉の落ちた桜の木の休眠時期に行く必要から、毎年12月から翌年の1、2月が適齢時期になります。この度の桜の植樹はそれにならって実施されました。

東京定例会合報告 2015年1月24日開催

文責・斉藤光弘（GNH研究所 東京事務局）

●概要

- ・日時：2015年1月24日（土） 15:30～17:30
- ・講師：津川智明氏（元JICA地方行政支援プロジェクト専門家）
- ・テーマ：『心地良さを創る』
- ・会場：早稲田大学
- ・参加人数：23名

●内容報告

2015年1月24日の定例会合の中で、ブータンにて長期でご活躍されている元JICA地方行政支援プロジェクト専門家、津川智明氏を講師にお招きし『心地良さを創る』と題して、ご講演いただきました。

長年ブータンに滞在された中で感じられた幸福感。昨年8月にご帰国されてから日本での日々の暮らしの中で感じられた幸福感についてご共有いただき、その後参加者全員で、ワールドカフェ形式の対話の場を設けました。

日本において桃源郷の様に扱われるブータン。2005年の国勢調査で、97%の国民が幸せだと回答したことで話題になりましたが、急速な都市化や消費の拡大が高まるブータンは、日本人が言う様に本当に幸せな状態なのか？との問いとともに、逆に、物質的にも豊かで、平和な日本に暮らす日本人は本当に幸せではないのかという問いかけが津川氏から発せられました。

津川氏は、幸せについて「その時その時の個人の置かれた状態を心地良いか否か、主観的に判断している。心地良い状態のときには幸せであると言う。個人の置かれた状態は、社会環境、自然環境、生活環境そして個人環境に左右される」と述べます。

社会環境とは「平和な国家。安全、安心して暮らせる社会。言論、宗教、職業の自由。人権の尊重」。自然環境とは「生活に適した空気や水。気持ちを癒す自然空間や森林。きれいな海や川。多様な植物や生物」。生活環境とは「行政施設、教育施設、医療施設、娯楽/スポーツ施設、通信施設、運搬施設、ガス・水道施設、電力施設、ゴミ処理施設、商業施設等の有無」。個人環境とは「健康、衣食住、仕事、家族友人関係、余暇、生活費等」を指します。社会・自然・生活環境については、個人の力で、改善することは難しいですが、個人環境は個人の努力で獲得・改善・向上が可能であるとのことでした。

どうしたら幸せになれるのか？という問いに対し、幸せは状態ではなく気持ちであるとし、個人環境を満たした上で、「こころの心地よさ」を創る必要があるとおっしゃいました。そのためには、「毎日、同じリズムで暮らすこと」「快食、快眠、快便（『心地良さの発見』高橋和巳著）」といった、日々の暮らしを丁寧に過ごすことが大切だとのこと。そして、自分を見つめ、「過去や将来」ではなく、「今」という時間を思い、幸せと感じる「日日是好日（にちにちこれこうじつ）」な生き方や、完璧を求め過ぎない「八勝七敗の生き方」の大切さについてご共有いただきました。

お話をいただいた後、参加者それぞれが考える「心地よさ」を感じるために必要な要素について、意見を交換し、自分自身の軸を再確認しました。

※同日、やや遅めの新年会も開催し、18名の方にご参加いただき、交流の場となりました。



会合の様子

掲示板

● GNH研究所 会員総会 &10周年記念イベント開催決定！

おかげさまで、GNH研究所は、来る2015年3月17日を以って、設立10周年を迎えます。そこで、代表幹事・平山修一の赴任地（インドネシア）からの一時帰国にあわせて、会員総会、および、10周年記念イベントを開催する運びとなりました。

会員総会では、これまでの10年間の振り返りを行うとともに、これからのGNH研究所の方向性について話し合いたいと考えています。10周年記念イベントでは、代表講演、滋賀県甲良町役場職員として長く同町のまちづくりに尽力してこられた山田禎夫氏による記念講演、そして、両講演者にJICAブータン元専門家の津川智明氏を加えた3名による対談といったプログラムを準備しております。

近頃めっきり参加できていないという方も、最近会員になられたばかりの方も、どなたでも楽しめる企画をご用意しておりますので、どうぞ奮ってご参加ください。

■概要

日時：2015年 4月 26日 (日) 14:00～17:30

会場：早稲田大学 早稲田キャンパス
国際会議場（18号館）3階 第三会議室

会費：無料 ※懇親会は別途会費を頂戴します。

■当日プログラム

14:00～15:00 会員総会

15:30～17:30 10周年記念イベント

代表講演 平山修一（GNH研究所 代表幹事）

記念講演 山田禎夫氏（滋賀県甲良町役場職員）

対談 津川智明氏（JICAブータン元専門家）

および講演者

18:00～20:00 懇親会

■お申込み

下記お申込み専用サイト「こくちーず」よりお申込みください。

<http://kokucheese.com/event/index/273352/>



パロ（ブータン）の青空市にて

GNH研究所 ニュースレター 第11号

発行元 GNH研究所（代表幹事：平山修一）

<http://www.gnh-study.com/>

発行日 2015年3月15日

編集者 高田忠典（GNH研究所 研究員）、藤原整（GNH研究所 研究員）

著者 平山修一 (p.1), 青木薫 (p.2), 津川智明 (p.3), 白井一 (p.4), 斉藤光弘 (p.5)

写真 藤原整 (p.1,6), 津川智明 (p.3), 白井一 (p.4), 平山雄大 (p.5)

※全ての著作物および写真の著作権は、上記の方々に帰属しています。